

平成二十四年十二月十日発行  
皇學館論叢第四十五卷第六号 抜刷

紹介

深見玄岱伝記資料  
「高府君久富孺人雙髮齒墓誌銘」の紹介

中  
澤  
伸  
弘

## 深見玄岱伝記資料

### 「高府君久富孺人雙髮齒墓誌銘」の紹介

中澤伸弘

#### □ 要 旨

徳川時代初中期の儒者でまた書家として著名な深見（高）玄岱については、既に石村喜英氏による『深見玄岱の研究』（昭和四十八年 雄山閣刊）の原著があり、その人物や伝については詳細な研究がなされてゐる。そのやうな中で、ここに紹介する「高府君久富孺人雙髮齒墓誌銘」は玄岱が永らく所持してゐた両親の髪と齒とを供養の為に埋葬した折にともに埋められた墓誌銘である。内容から玄岱の両親への思慕が汲み取られ、また些細ながら新知見が伺へるとともに、徳川時代の墓誌研究の一資料としても貴重であり、更に書家である玄岱の文字研究にも資するのではないかと思ひ紹介する。

#### 一

木下順庵門下で後に新井白石に招聘され、幕府の儒官となり、また書家として著名な深見（高）玄岱は徳川時代初期の慶安二年に、高大誦を父、久富氏の女を母として長崎に生まれた。祖父は福建省彰郡の明人高寿覚で、薩摩人である父大誦はこの寿覚に養子に入り、父の姓である高を名乗るとともに、その遠祖が渤海王であつたとの伝承により、渤海（フカミ）とも称した。（但し渤海をフカミと読むには難があつたため深見をも姓とした。）大誦は長崎の唐通事として著名であり、かの一覽橋（眼鏡橋）を架設した人物である。玄岱は父とともに長崎に在

住してゐたが、延宝年間に京の木下順庵に師事、再び帰崎の後  
に薩摩藩に仕へなどもしたが、六十一歳の宝永六年に新井白石  
に招かれて幕府の儒官として江戸に出て、白石をはじめ室鳩巢  
などに親炙した。また書家としても名高く、独自の唐様の書体  
をなした。江戸浅草寺に掲げてあつた「施無畏」の額（戦災で  
焼失）は晩年の作で著名であつた。享保七年八月八日、年七十  
四で江戸に逝き、上野の寛永寺護国院に葬られた。玄岱及び父  
大誦については、早く『先哲叢談』に記すところであり、また  
石村喜英氏の『深見玄岱の研究』（昭和四十八年 雄山閣刊）  
が備はるので委細はこれに拠らるたい。

## 二

架蔵の「高府君久富孺人雙髮齒墓誌銘」は、この玄岱が両親  
の髪齒を収め、供養に建てた墓に納めたものであり、縦十八・  
五糎、横十八・五糎 幅一糎の正方形一枚の磨かれた石の表裏  
に次のやうな文が彫られてゐるものである。（拓本参照、読み  
やすくするため文字間をあけた）

高府君久富孺人雙髮齒墓誌銘  
先考英壽院高府君尊諱但有號一  
覽公後號大誦居士薩州千代郡  
之産也年十六歲入大明二十七  
歲回

本朝應肥前長崎鎮主之命撰爲唐  
大譯士俗號曰渤海久兵衛遂家  
於長崎性直尚朴慷慨豁達恭學  
好禪得黃檗木菴和尚印可年六  
十四歲病卒於正寢臨終說偈曰  
空拳頭上免生角五色□中駕六  
龍返面無情佛祖也超方自在大  
神通不肖子女岱恪能取貯尊髮  
尊齒五十年於茲  
先妣貞良院久富孺人長崎人也年  
六十一歲病卒於正寢並恪取貯  
尊髮四十餘年矣今歲  
正德四年甲午九月七日卜地於武  
藏府中普門寺門外得八畝步所  
距十月十七日乙酉辛巳時具一  
小棺槨用壬丙之向奉瘞焉銘曰

一莖十髮 片齒雙牙

父母血脈 永藏無涯

第四男不肖子高玄岱稽顙

百拜敬誌

享保七年六月廿七日遷葬於

上野護國院境内 坐乾向巽

てゐなかつたことである。玄岱はこの後薩摩にまた江戸に転居するたびにこの両親の尊髮尊齒を携へてゐたやうで、父逝いて五十年、また母は四十余年ともなつたと記してゐるのである。このやうに携へ、家に奉祀して来た尊髮尊齒であつたが正徳四年九月に武蔵府中の普門寺の門外の土地を定めて、十月十七日に供養の墓を建てて取めたのであつた。その後享保七年に上野の護國院へ改葬したのである。

これによると、まづ父についての略伝が紹介されてゐる。諱を但と言ひ、一覽とも称し、後に大誦居士と言つたことは既に諸書の記するところである。また薩摩千代郡の産で、養父高寿覚とともに十六歳の折に渡明し、二十七歳の寛永六年に帰国したことも知られてゐる。そのうち長崎で唐通事となり、また木庵和尚について黄檗禪に帰依し、六十四歳で寛文六年に逝いたことも明らかである。玄岱十八歳の時であり、長崎の皓台寺に葬つた。この時、玄岱はその髪と齒とを謹んで拝受したのであつた。また母は久富氏であり、天和三年八月に逝き、また長崎の皓台寺に葬つたことも明らかである。但し『深見玄岱の研究』ではその歿年を六十歳としてゐるが、この墓碑銘では六十一歳としてゐる。このとき玄岱は三十六歳であつて、母の遺髪を謹んで拝受したのであつた。ここに玄岱の手許に父の遺髪と齒、また母の遺髪が揃つたのであり、このことは今まで知られ

この墓碑銘の作成年は府中に土地を得てそこに埋葬した、正徳四年であり、玄岱が六十六歳であつた時である。正徳四年は父が逝いてから数へ五十年に当たるが、母については十年余の齟齬が生じるのが謎である。何にせよ父の五十回忌を記念した追慕供養の建墓であつたことがわかる。文末に享保七年とあるのはそれを更に上野の護國院へ改葬した時の年次であり、拓本を見れば「享保七年」以降の文字がそれ以前の文字より細書となつてをり、後に書き加へられたものであることが明らかである。

### 三

玄岱は六十一歳の宝永六年、江戸に招かれ、爾來歿するまでの十五年を江戸に生活することとなつた。江戸に儒官として暮らし、また書家として文人に交はり、その晩年は充実した

深見玄岱伝記資料「高府君久富孺人雙髮齒墓誌銘」の紹介（中澤）

日々であつただらうが、父母また係累の眠る故郷長崎は遠いがゆゑに且つ懐かしき場であつたはずである。正徳四年玄岱は何故に江戸を稍離れた府中の普門寺外の地に父母の供養の建墓をしたのが判然としない。五十回忌の記念にしても、なほ江戸の近辺があつたはずである。普門寺は現在も府中市宮町に存する真言宗の寺院であるが、ここには「門外」とあるので、寺域ではなさうである。玄岱は武蔵国分寺の扁額をも揮毫したことと、ややもするとこの近辺に往来し、その風光を愛でたのかもしれないが、なほ不明である。府中にあること八年にしてその墓は江戸市中の上野寛永寺護国院に遷されたのであつた。

#### 四

深見家が護国院の檀家になつたのは天和三年といふ。これは護国院蔵の『檀越戒名帳』『檀越由緒略記』によつて作成された「護国院檀家一覧表」によるものだが、玄岱が初めて江戸の地を踏むのはそれより二年後の貞享二年、三十七歳の四月であり、それも島津光久に従つての短期間であつて、天和三年には長崎に在任してゐたのであつて、江戸の寺院の檀家となるのは無理がある。これはこの天和三年八月に逝いた母の忌日が、誤つて入檀の時とされた誤解によるものと思はれる。

上野の護国院は、徳川氏の菩提寺である東叡山寛永寺の子院の一つであり、幕府の庇護のもとにあつた寺院である。徳川時代初期の草創にかかり現在地（台東区上野公園）に転じたのは宝永六年であつたが、享保二年正月二十日の大火で焼失した。再建には数年要し、享保七年に現在の本堂（釈迦堂）が落成し、現存の「護国院」の扁額が享保十年のものであることなどから、この頃に再建が整備されたと考へられる。丁度玄岱がこの墓誌とともに両親の供養の墓をこの地に設けたのは、このやう時であつたのである。またそれだけではない、玄岱はこの享保七年の八月八日に年七十四で江戸に逝いた。この春以来病臥が続いたと言ふ。そして玄岱がこの両親追慕供養の墓をここに遷し設けたのは、実は玄岱が逝く一ヶ月余以前のことであつた。自分の命の短きを察した玄岱は、自らの墓を上野の護国院に定めたのであり、この時に老いてもなほ追慕してやまぬ両親の髪齒を、八年前に埋葬安置した府中から己の瑩域に遷し、死してもなほ両親とともにあらんとし、また以後続く江戸の深見家のその初代となる自分とその両親をもここに併せ祀つたのであつた。玄岱には遠く長崎に葬られた両親を常に近くに奉祀せんとする厚い志が存してゐたと言へまいか。

## 五

東叡山寛永寺護国院は徳川時代は徳川氏の菩提寺の一子院として手厚い庇護を受けてきたのであるが、維新後は苦難の道であつた。ただ寛永寺の他の子院が維新時の官軍と彰義隊との合戦（所謂上野戦争）で焼失したのに比して、この護国院を含む幾つかの子院は焼失を免れたのは幸ひであつた。しかし、大正十三年、護国院は境内地を縮小し、本堂である釈迦堂を前方に移転し、また広大な墓所を東京の郊外に移転し、その跡地に第二東京市立中学校（現都立上野高等学校）が建てられた。大正十二年の関東大震災で壊滅的な被害を受けた東京市は教育による立て直しを図り、それがこのやうな形となつたのである。第二東京市立中学校の校地は護国院の墓地と境内の一部とからなり、この移転時に無縁となつてゐた墓はそのまま同校の校庭の下になつたのである。

同校校舎はその後六十年近く経過したこともあつて、旧墓地であつた校庭に新校舎を建設することとなり、昭和六十一年から埋蔵物の調査が東京都によつてなされ、詳細な報告書である『東叡山寛永寺護国院都立上野高等学校内埋蔵文化財調査報告』（平成二年）が刊行されてゐる。

深見家の墓はすでに大正の移転時に多磨霊園に移転してあつて、この度の校舎建築に伴ふ工事とは関係はないが、この報告書によると深見家の墓所には、旧墓地の図面から、初代玄岱が儒礼による葬儀をしたほか、戒名のある墓碑が十四基と家仕の一基が確認されてゐる。何れも玄岱以降であり、この両親の髪齒墓についての記載はない。

## 六

拓本でお判りのやうに、この墓碑銘の文字は整つた楷書で書かれてゐるが、これは玄岱の書であらうか。もしさうならば正徳四年、六十六歳の筆である。独自の唐様の字を書いたと言ふ玄岱の文字は、どちらかと言ふと隷書混じりのやや丸味を帯びた感じのするものであつて、この趣とは若干相違するものである。私にはその書について判断する眼力がないので、書の専門の方のご意見を伺ひたく思ふ。ただ父母への深い思慕が存したのであらうから、このやうな謹厳な文字を自ら書いたとも思はれるのである。

最後に本墓碑銘が私の手許にある経緯を記しておく。私が都立上野高校に赴任したのは平成五年であり、在職中の平成十年頃に焼却炉近くの物置の廃棄図書類の下敷きになつてゐる一石片を見出したのである。これは偶然であつた。黒く汚れ、下敷きになつてゐたため、何箇所か疵や剥離の状態があるものの、文字が書かれ「墓誌銘」とあるので、それと判断はできたが、どのやうな人物のものであるかは当時は調べる事もしなかつた。なぜこのやうな所にこれがあるのかは同僚もその来歴については知らず、危ふく廃棄されるところであつたので、取りあへず自宅に保管し、墓誌銘であることから棚を設けて箱に入れて鄭重に祭祀してきた。

私が上野高校に赴任した平成五年は、既に新校舎になつて数年経過してゐた。この墓誌がこの新校舎の建設にあたり出土したものであるなら、先の詳細な『東叡山寛永寺護国院都立上野高等学校内埋蔵文化財調査報告』に記載されてゐなければならぬが、そこには墓誌の出土は四基とあつて、その中には含まれてゐない。と言ふことはそこに漏れたものとも考へられるが、これだけの詳細な調査においてこのやうな墓誌銘のある石

片を見逃すことはないであらう。さうなると大正の創立時に発掘されたものが、そのまま図書の下敷きとして使用され、新校舎に図書が引越しをしたときも書物に紛れて放置されてゐたのかもしれない。

先年の東日本大震災で、老朽化した拙宅は書棚等が転倒し、大変な思ひをした。この時にこの墓誌銘も棚から落ちた。これを契機として改めて調べたところ、この小文に記した通りの貴重なものであることが判つたのであつた。この際は是非とも深見家の御子孫の方の手にお戻しして、厚く祭祀されることを願ふものである。

(なかざわ のぶひろ)

都立小岩高等学校主任教諭 博士(神道学)

高府君久富孺人雙髮齒墓誌銘  
 考英壽院高府君尊詳但有發一  
 臂公後號大誦居士羅州千代郡  
 之產也年十六歲入太明三十七  
 歲回  
 本朝應肥前長崎鎮主之命撰為唐  
 大譯士俗稱曰勤海久矣爾家  
 於長崎性直勤朴廉潔給運參學  
 好禪得黃藤木奄和尚印可年六  
 十四歲病卒於正寂臨終認偈曰  
 空拳頭上免三角五色中窟六  
 龍返面無情佛祖也起方自在大  
 神通不肖子孫能收貯尊髮

年齒五十年於茲  
 先女貞良院久富孺人長崎人也年  
 六十一歲病卒於正寂並落收財  
 安四十餘年矣今歲  
 正德四年甲午九月七日卜地於武  
 藏府中普門寺門外得八畝步所  
 距十月十七日乙酉辛巳時具一  
 小棺槨用千丙之向奉瘞焉銘曰  
 十對十髮片齒雙不  
 母血脈永藏無涯  
 第四男不肖子高玄低稽顙  
 百拜敬誌  
 享保七年六月廿七日遷葬於  
 土野墓園元境川坐乾向巽